

## 第 37 話〈大石垣〉の要約と参考資料

### 第 37 話〈大石垣〉の要約

「樋の口」のモカさんは男勝りの性分で、斜面にころがる大石を焼いて砕き、割った石で石垣を築き、その上をならして田畑にしていきました。高さ 8 メートルの大石垣の上の田は、ヒ素鉱山に買収されて焼き殻の捨て場にされ、二度と作物の育たない荒地と化しました。

### 第 37 話〈大石垣〉の参考資料

#### 37-1 樋の口の耕作地

岩戸竿帳（慶長 14=1609=年検地台帳）

百姓（上）善九郎の屋敷および耕作地

一、屋敷 9 間・12 間 3 畝 18 歩 百姓上善九郎

山ノ上四所合 御鉄砲衆源内給

一、切野 8 畝 善九郎作

小迫平

一、切野 8 畝 善九郎作

柚木畠

一、山畠 貳所合 5 畝 同作

はきノかくら 四所合

一、切野 5 畝 同作

さるかき

一、切野 3 畝 同作

はしつめ

一、山畠 3 畝 同作

田下

一、山畑 12 間・24 間 9 畝 18 歩 同作

ひノ口屋しき下

一、下畠 14 間・34 間 1 段 5 畝 26 歩 同作

林ノ下

一、山畠 四所合 4 畝 善九郎作

かうちノひら道下

一、下畠 12 間・24 間 9 畝 14 歩 善九郎作

同所上

一、山畠 7 畝 同作

同所ノ上兩平

一、切野 3 畝 同作

万延元（1860）年「岩戸村申改見取田小前帳」より

土呂久門

土呂久大川端

一、見取田 壹畝拾五歩 歳松

慶応 2（1866）年「岩戸村寅改見取田小前帳」より

土呂久門

天神の後

一、見取田 貳畝歩 歳松

### 37-2 佐藤歳松について

外録門百姓惣代

嘉永 5 年（1852）5 月の「差上申御請書之事」（「外録銀山御用留之内覚書抜」）より

文書の差出人として次の名前がある

岩戸村外録門百姓惣代 歳松

前ニ同し 勇藏

組頭惣代 竹五郎 勝次

同村弁指 佐藤近平

同村庄屋兼帯 土持霊太郎

明治初頭「岩戸村寺社・山伏・小侍・足軽・百姓家名録」より

佐藤歳松

一、文久三年七月八日、去年献納銀ニ付キ脇差御免被成候

一、慶応四年六月二十七日、被召出去年献納ニ付キ苗字刀御免。新切三畝被下置候

一、明治三年二月六日、被召出御軍用之方江献納ニ付刀御免。新切八畝歩被増壹段壹畝歩高ニ被成候

### 37-3 モカさんの大石垣

藤寺非宝「岩戸村維新以前田成開発史」P30~

この中に（万延元年岩戸村申改見取田小前帳のこと）、「土呂久大川端見取田壹畝十五

歩 歳松」とあるものに就て、大いに感ずることがあるから、ここに記述して世の模範としたものである。これは土呂久門樋ノ口百姓歳松が、その妻モカと力を合せて開田した最初のものである。仕事の中心主体は寧ろ妻のモカであった。彼女は性質極めて勝気で、所謂男勝りであった。幼児より最も好むものは、女に似合はしからざる石垣築きであった。頭をばいつも手拭で徳利包みにして、キリッといでたち、夜となく昼となく、その近くの石原同然の原野を開墾した。大石を運搬することは、専門の石工でも仲々六ヶ敷いものであるが、モカ女の秘伝は青竹一つでよかった。大きな青竹に何百貫とも知れぬ大石を載せて日庸人夫にこれを曳かしめ、自分はそれを監督した。そして又、驚かされることは、どうにも始末のつかぬ大石をば女の身を以てこれを玄翁で以てたたき壊したものであった。先ず大石の下に穴を掘り、それに若竹等を沢山つめ込んで火を焚き、ウンと熱した時、上から玄翁を参らせた。所が、石を熱しめることは寒中に限るので、昼は薪を集め、夜は徹夜しながら火を焚き、その暖かみにでうたたねをしたといふ。大正元年十月十五日、八十一歳の高齢を以て念仏もろとも大往生を遂げたが、モカ女の信仰とその大事業は今尚世人の耳に残って居ることで実際に見なければ合点の行かぬ程の大石垣である。歳松夫婦の大事業は、その石垣とともに永久に記念されるであろう。

古田 枚数 13 枚 畝歩 2 反 5 畝歩 石垣 約 600 坪

古畑 枚数 16 枚 畝歩 1 町 1 反 2 畝歩 石垣 約 400 坪

右は夫婦 1 代の作り出しである。法名左のごとし。

釈誓彰 明治 34 年旧 12 月 8 日往生

佐藤歳松 行年 78 才

釈尼迦寿 大正元年 10 月 15 日往生

佐藤モカ 行年 81 才

モカさんの大石垣を見学して (1983 年 12 月 16 日)

みごとなものだ。高い所は 8 メートル、幅は 25~30m だろうか。樋の口の上を通る旧道沿いにある。この石垣の上がもと田んぼだったとは！ これまで知らなかったことが恥ずかしい。その後、鉾山に売られて、焼き殻で埋められてしまった。二度と、元の田に戻ることはない。(川原)

佐藤ツルエさんの話 (1984 年 1 月 20 日聴取)

モカばあさんは昼間、山から薪をいっぱい集めてきて、大きな岩のまわりに積み重ね、夜になると、それに火をつけて石を熱した。熱くなったところで水をかけて、ひびがはいると、大きな玄翁でたたき割った。昼は、薪を集め、夜は火のそばで番をして、一日中働いた。石垣の上の田と、そのまわりの小さい田 2 枚を合わせて、全部で 1 反の田があった。水は「水神淵」(栄志さんとこの下) から引いた。石垣を築いて田を開くのに、雇人 (やといで) が 2 人おった。畑で働くときは、前掛けの丈夫なやつに小石を拾って、

外へ運び出した。鉾山が盛んな頃、土地や家を全部で 1000 円とかで売らしたげな。農地改革で、石垣の上もうちんところに戻ってきちよる。

佐藤三代士さんの話（1984 年 7 月 22 日聴取）

おモカばあさんが操んところ（樋の口のこと）の田畑は開いたもんです。夜、あんまり眠らんずく。石なんか、火を焚いて、焼き割りよったんですが。熱心な人でした。操の代になってから、荒地になったんですが、また荒れますわ。焼酎工場に働きに出んでも、あるとよ、仕事は。このへんの山林 100 町くらい持つとるんじゃから。